

徳島 建治寺縁起復活公演 小屋掛け人形浄瑠璃バスツアー

2005年3月26日(土)

出演：文楽大夫 豊竹英大夫・三味線 鶴澤清友氏
人形座 徳島神山町 寄井座

行程：大阪駅→徳島建治寺→酒蔵レストラン『堂真』



本日も晴天なり。四国への浄瑠璃巡礼への旅の朝はいつものように晴天。大阪駅に急いだ。8時20分習合のところ、35分に森川千世子さんとご友人が、40分に杉山さんがいつもの笑顔で現れたところで全員集合、ヒルトンホテルの前まで行進、バスに乗り込んだ。私と木下さんとは下見をいれりと三度目の徳島行となる。何故、徳島か・・・前回のツアーでも紹介したが、手話を勉強するなど私が会社で主宰していた「ボランティアサークル」の一員であった先輩が縁あって嫁ぎ先の徳島の神山町で人形浄瑠璃の一座「寄井座」の一員になった。江戸時代から村民が運営してきた一座には、女流作家の宇野千代さんも作品に仕上げた『天狗久』という明治生まれの人形の頭を作る名人が残した頭が十数体あり、ほとんどが徳島県の重要文化財に指定されている。それらの人形は陳列棚に飾られ

ることなく、村人の手によって現役の浄瑠璃人形として今も舞台で活躍している。

昨年9月は「すだち」の生産量日本一の神山町で採り放題と銘打って、木の棘や蚊の襲撃をものともせず“すだち”を採りまくり、農村舞台の襖カラクリや小さな小屋で「傾城阿波の鳴門」を鑑賞し、昼食には初夏には蛍が乱舞する清流そばのログハウスで岩手の宮古漁港から直送してもらったまるまると肥った秋刀魚と地元の新鮮なあまごを炭焼きし臭いを嗅ぎ付けてやってきた野良猫と同様に目を細めて焼き立てを満喫した。そして、今回はその時話にでた大阪の文楽と徳島の人形浄瑠璃のコラボレーション。1月には英大夫を文楽劇場に訪ね、大夫の発声法を体験した。そして、今回も晴天の高速道路をひた走り、淡路のサービスエリアで休憩、そして鳴門大橋を渡り徳島駅前をバスは横切り、県庁の前で信号待ちをしている間に掲示板に張られているポスターが目についた。私たちが今回観劇目的の建治寺での演目紹介、青い不動明王の人形が目についた。地元の新聞でも紹介されており、さて、どれだけ人が集まるか。バスは山間部に入った。途中小学校にバスが入る。ここからは、山間部の山道を登るため、小型のマイクロバスに乗り移ることになる。バスを降りると、神山町に嫁いだ友人のご主人の姿があった。地元の仕出し屋さんにお弁当をお願いしていたのだが、これを届けてくださったのだ。参加者がバスをおり、お弁当を受取って、マイクロバスに乗り移る。バスは国道から車体を山の小道に沿わず。隣座った地元の人が、「あのお寺が建治寺だよ」と指差した。山腹の緑に埋もれるように確かに寺院の屋根を確認することができる。「あそこまで行くんですか」「修行の寺だからねえ」と、細い九十九道をバスは這い上がっていった。10分ほど山を駆け上がると、視界が広がった。バス十台ほどが置ける広い駐車場があり、寺への入り口にはテントをはった記帳場で、各自署名すると、当日のパンフレットと紅白の干菓子のはいった袋をもらった。「大阪から来ましたが・・・」と言うと、「おつかれさまでした。座布団をもってってください」中腹まで上がってきた車の後部座席から色違いの座布団を受取った。友人が大阪からくる私たちの為に、一座の家にあった座布団を持ち寄って車に積み込んでくださっていたのだ。眼下をみおろすと、すり鉢上の広場に舞台があり、舞台前にはビニールシ

ートの上に御座が敷かれていた。11時半だったが、すでに二十数名の先客が舞台の前に陣取っていた。参加者はそれぞれに思い思いの場所に座布団を置いた。そこに、英大夫が下見に舞台前に来られたので、参加者で囲んで写真を撮った。



更に、前回も駆けつけてくださった農村舞台の会の事務局を担当している佐藤さんとも挨拶した。徳島県庁に勤めながら、郷土の歴史をと物置になったり、過疎で朽ちるにまかせた農村舞台の復活を手がけて、昔ながらの公演を手がけて2年。佐藤さんは、県庁での仕事を抱えながら、農村舞台復興の打ち合わせなど、二足のわらじを履くのが「しんどいなあ」と思いはじめた中で、大阪でも塾塾という会を働きながら運営している私の活動がたいへん励みになったそうだ。両者に共通するテーマは『郷土の先人の思いを現代に生かす』。なんでもかんでも東京一極集中で、待ちづくりも家も人も暮らしも金太郎飴みたいに同じ顔が出てくるがおかしい。日本人が長年培ってきた風土がもつ各地それぞれの暮らし、一人ひとりの暮らしがあったはずだが、日本人は顔を失い、心を失い、暮らしを失いかけているのではないか……。次に何を伝えるのか。どの時代にも迷いはあったが、何に迷っているのかさえ見極められないほど、今日本は混沌としている。先に道を見失ったのなら、過去に生きた人々の声に耳傾けて、次の歩みの羅針盤になればと思いつつ、私とて自問自答の大阪探し、自分探し、もう11年続けているが、大阪の先人の言葉は尽きることがない。気がつくと、お天道様は頭上で輝き始めお腹の虫も泣き始めたところで、お弁当を広げた。大降りの風呂敷をあけて蓋を挙げると、あまご一匹がドーンと薄紅の身を横たえ、巻きずしにあまごの押し寿司、大振りの蓮根や人参などの煮物に、たら芽のやフキノトウの

山菜天麩羅、わらびの煮物に紅白の大根と人参の酢づけ、蜜柑半分が盛り付けられていた。食後にお茶菓子と書かれた包みをあけると生菓子3種が顔をだし、ペットボトルのお茶で喉を潤した。野外で車座になりお弁当を広げる開放感、ゆったりした時間に癒される。周囲は車の音も聞こえぬ山懐。

食事が終わる頃には、ピストン運転のマイクロバスで観客がやってきて客席が賑やかになってきた。寺院は広場から階段を登ったところにある。そこから景色を眺めると瀬戸内海が碧く輝き、鳴門大橋の勇姿も一望できる。客席に振舞え割れた生姜湯を飲みながら開演を待った。

1時半、舞台の幕が開いた。この舞台は小屋掛け舞台で、架設の舞台と人形浄瑠璃用に「大夫座」が舞台の向かって右側に設えられている。幕が開くとおさげ髪で眼鏡をかけたセーラー服姿の女の子が頬を真っ赤に染めて「トザイ。トウザーイ」と口上を叫んだ。そのまっすぐな声に感動。まずは、川内北小学校人形浄瑠璃クラブの六年生が三番叟の舞を披露してくれた。キビキビとした動きの中に、一生懸命が見え隠れし、初々しい春の力をも感じることができた。舞台を降りた小学生の子供たちから、クラブの名前を焼きこんだおせんべいを配ってもらいまし。

続いては、おまちかね。^{じつろくけんじやまみのりのほな ていあ}「実録建治山御法之花、貞阿

^{しょうにんたきぎょうばのだん}上人滝行場之段」となった。演じますのは、文楽大夫豊竹英大夫・三味線鶴澤清友、人形座は、寄井座！



^{じつろくけんじやまみのりのほな ていあ}「実録建治山御法之花、貞阿上人滝行場之段」演

目紹介：忠蔵と左代の兄妹が、仇敵を追って敵討ちの旅に出たのが三年前。長い旅路のはてに弘法大師のお

告げを聞き、阿波の霊場十三番札所大日寺奥ノ院建治寺にやってくる。そして、建治寺の滝で滝行をしちえる宿敵石川藤斎は人々に崇め慕われている貞阿上人その人であった。仇討ち装束に身を固めた兄妹は、滝行をする無心の上人に後ろから斬りかかろうとする。目に入る「正道頓悟居士」と彫られた背中の入れ墨。それは亡き父の戒名であった。そのとき、天にわかにかき曇り落雷響く雲の彼方から、建治寺の本尊蔵王大権現と亡くなった父正作が現れる。父は兄妹に、藤斎のこれまでの所行を語って聞かせる。故意に殺めたのではないこと、返り討ちにしてくれとの書置きはお家再興を奮起させるためのものであったこと、正作の戒名を入れ墨にまでして菩薩を吊っていたこと、大勢の人々に功德を施し幼かった兄妹のことはかたときも忘れなかったこと、再任官をさせるため無抵抗で打たれる覚悟をしていること等々である。真実を知らされた兄妹は、仇敵藤斎憎しの考えを改めて、藤斎の功德に感謝すると共に、悲願であるお家再興を胸に秘め、心静かに国元へ帰っていく。



「阿波独自の浄瑠璃本」：この作品は幕末から明治初年にかけて、建治寺の中興の祖と讃えられた貞阿という人物から取材して創作されたものである。貞阿は四国巡礼中、観正寺に杖をとどめ、建治寺で荒行を重ね、観正寺から僧籍をゆるされ、後、建治寺の住職となった。貞阿は篤行の人として人望も厚く、信者も四方から集まり寺は栄えた。しかし上人の過去における経歴には不明なことが多く様々な伝説が生まれた。この外題の制作は命じの末又は大正の初めというが詳細はわからない。入田町月の宮の医師松崎団平氏が中心となり、佐藤熊太郎（芸名波玉）、高松高太郎（芸名竹本瀧滴）等が徳島出身の文楽関係者の指導を受け、

貞阿上人の伝説を銃瑠璃化したもので、松崎氏は文の構成をし、佐藤氏が三味線、語りは高松市がそれぞれ担当した。本外題は数少ない阿波で作られた浄瑠璃の一つであるが、制作時期が浄瑠璃の衰退期であったため一般には普及されずに終わってしまった。

このたび、徳島県文化復興財団、徳島県郷土文化会館では、この郷土の特色ある人形条理の復元を試み、人形の制作、並びに外題の補綴作業、出演人形座による操りの練習を実施し、貞阿上人ゆかりの寺、建治寺境内において、復元披露公演の運びとなった。

建治寺：建治寺は、徳島市入田町金治230にある東寺真言宗の名刹である。山号を大滝山、院号を来迎院といい、本尊は金剛蔵王大権現像である。奈良時代に修験場の開祖という役行者が開いたと伝え、一説に建治年間(1275～78)に開設されたともいう。幕末、明治維新期に貞阿上人によって中興された。その後、荒廃したが、第二次世界大戦後、久米秀信師によって復興された。建治の滝を信仰の中心とする寺で、境内周辺に修行場の行場が点在する。四国霊場十三番札所大日寺の奥の院としても知られ、寺宝に延徳2年(1490)に運慶末裔と称する康珍(京都東寺講堂の大日如来像作家)によって制作された阿弥陀仏如来像(徳島市指定文化財)などを所蔵する。

貞阿上人：貞阿上人は、文化二年(1805)3月12日、加賀国連華村(現石川県金沢市)の井口権三の三男として生まれた。俗名を花寺貞信といい、安政2年(1855)4月28日阿波国入田村の観正寺で得度した。遍路として四国霊場を巡り、観正寺に足をとどめ、当時、観正寺末であった金剛菩薩堂(現建治寺)で修行した。以後、寺の復興と布教に努め、多くの信者をえた。実際、上人建立の写し霊場、八十八の石塔の中には、徳島城内の奥女中衆の寄進もあり、上人が広い階層の信者の帰依を得ていたことが知られる。明治8年(1875)2月18日、補訓導を拝命したと記録にあり、当時、観正寺に置かれた小学校で教鞭をふるったと考えられる。明治18年旧7月3日に没した。享年81歳。墓碑銘に「白蓮舎照道貞阿上人」とある。

まず英大夫と清友氏が大夫座に座ると、幕があく。舞台背景は、布に描かれた山と滝、底に仇討ち装束の兄

と妹が登場し、宿敵、貞阿上人の後を追ひ、滝場で袈裟を脱ぐとその背中に入れ墨で父戒名が刻まれている。その姿に心揺らいでいるところへ亡き父が現れ、青いお姿の大権現が姿を現す。この大権現様は、この復元舞台の為に四国大学の教授が奮闘された人形とかで、身の丈が140センチほどの大柄、煙と共にすくっと立ちあがった姿は威厳があったが、ぐっと睨み付けたかと思うまもなく姿を消してしまった。今回が初演だけに、大夫も三味線も人形もぶっつけ本番。寄井座では、事前にテープに吹き込まれた義太夫を聞いていたが、徳島の大夫さんよりもテンポがかなり遅いので人形の動きに間を持たせなくてはならないとのこと。果たして幕が開くと初演のぶっつけということもなり、寄井座の人形座も滝行に打たれ続ける貞阿上人に向かって長老が「早く前向け」という声が客席に響く。それぞれの動きも、素朴で朴訥とした動きがかえって新鮮に見えた。

最後は、寄井座と阿波の女性義太夫との壺坂観音霊験記沢市内之段山之段を一時間程楽しんでいううちにお天道様は西に傾き、山の木々が風が吹くたびに梢の枝を震わす、時々三味線の合の手を打つように鳥が鳴き始める。見上げると青い空、お弁当と座布団持ったのどかな浄瑠璃観劇、なんだかとても贅沢で豊かで、これが正しい日本のエンターティメントなんだと、小屋掛け舞台初体験ながらとても楽しんでいた。古来より農閑期の楽しみとして、人々は舞台の前に集ったのだろう。自分の中に潜んでいる日本人の遺伝子の奥底から懐かしさが込み上げる。幕が閉まると、英大夫と清友氏らが呼び出されて花束贈呈。声や三味線が山々に響いて心地よかったとのこと、笑顔が印象的だった。



お天道様が西にかなり傾きはじめた、見上げた木々は

皆桜の大木で、まだ蕾がかなり固いが、もし咲いていたら桜の下での観劇であったろうと。片付けの為横断幕やらが剥ぎ取られ小屋掛け舞台のたくましい骨組みが露わになっていく作業を眺めながら、駐車場に戻った。ゆっくりしていた駐車場に戻った為ピストン運転のバスの最後となり、おまけに二班に分かれてしまったので、最終のバスで全員が山の下まで降りた頃は5時になっていた。

神山温泉に入る予定だったが、ゆっくり入れないということで多数決で、後ろ髪を引かれながら、夕食の会場「堂真」に向かった。

大阪のある会合で神戸の酒心館の安福社長とお会いし、3月は徳島に行くというと酒蔵をレストランに活用している名店があるのでと、「堂真」を紹介いただいた。この蔵は「勢玉」という酒造メーカーの明治時代建築の酒蔵で、平成11年に国の登録文化財に指定され、本蔵はイベントホールとして、切妻造りの総二階建てで麴を保存していた中蔵はレストランとなり

レトロモダンな建物として活用されているのを、勢井社長自ら案内いただいた。ショップで買い物をした後、私たちは二階でコースをいただき、かも肉やら最後には美味しい御蕎麦が出てきた、そこに、農村舞台の佐藤さんも駆けつけてくださり交流会となった。

美味しいお酒で酔いも回り、酒蔵の居心地

の良さに時間を忘れて寛いでいると9時。慌ててバスに飛び乗って、鳴門大橋を渡り、一路大阪へ、大阪駅には11時過ぎとなり、たっぷりと徳島を楽しんで家に帰り着いた頃には翌日になっていた。

文楽と阿波の人形座とのコラボレーション。新しい朝鮮として、今後の展開が楽しみだ。

勢玉 創業者・勢井種蔵が一九〇二(明治三十五)年に酒作りを始め、五二(昭和二十七年)年に株式会社化した。問い合わせは〈電088(623)2777〉。



参加者(敬称略)

一般：内向恵美子・後藤稔・西岡よしえ・西野薫・佐藤幸代・林紀公子

塾生：大森史子・木田信生子・北川弥寿子・
木下奈美子・杉山英三・田中稔三・中島一・西野晃・
西野順・原田彰子・東口恵子・森川千世子